２０１０／０４／１１　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：永遠の希望を失わないために２
聖書箇所：ローマ人への手紙　８章１９－２２節

希望は人に生きる力を与えるものです。大変な問題の中にあって、絶望の中にあって、希望がその人に力を与え、生きる勇気を与えます。私たちはそのことを様々なことで経験しているかもしれないし、そのようなことを経験された皆さんの話を耳にします。ユダヤ人たちは大変な苦しみを経験しました。苦しみに次ぐ苦しみを経験したユダヤ人たち、彼らはこのように考えたと言います。彼らは時間を今の時代と後の時代とに二分化するのです。確かに今は、この世は悪に満ちたものでありそれは罪や死や滅びに束縛されているが、後にはすばらしい約束がある、主の日が訪れる、その日にはすべてがさばかれ、世界の基が揺らぎ打ち砕かれるときだと。ユダヤ人は今の苦しみの中にあって後の世の祝福をしっかりと覚えながら歩んで行きました。そのことを知る意味でも、旧約聖書が書き終えられて新約聖書が書き始められるまでの中間の時代に書かれたユダヤ人の様々な文献が残っていますが、その中の一つを見ましょう。「シビルの託宣」というのがあります。シビルが書いた神のお告げというのでしょうか。その中にこのようなことが記されています。「大自然の母たる大地は人間に無数の多量の穀物、ぶどう酒、油といった最善の実をもたらす。しかり、天からは甘い濃厚な蜜がしたたる。木々は特有の実を産する。豊かな羊の群れや雌牛、子羊、子やぎはそれぞれ実を産する。大地は白いミルクのごとき甘い泉を噴き出させ、町々は喜びのおとずれと野の産物とで満ちる。国中には剣も戦いの騒音もない。大地はもはや深いうめき声で身もだえしない。戦争はもはやなく、国中は干ばつや飢餓、穀物を荒らす霰も降らない。」と。少しだけですが、私たちは彼らがそのような世界を待望していた様子を見ます。というのは、この中間の時代にもユダヤ人たちはみな苦しみを経験していました。その苦しみの中にいる彼らを励ましたものは「希望」です。先のこと、未来です。これはユダヤ人のことですが、私たちイエス・キリストを信じる信仰者に与えられた祝福の一つ、それは紛れもなく「希望」です。今日、私たちはまたこのみことばを通して希望について学んで行きます。皆さん、私たち信仰者は希望を持って生きる者である、と思いませんか？希望を持って生きるから、私たちは日々いろいろなことを経験してもその中にあって慰めを得るのです。私たちは神に希望をおいて、神に期待を持って歩み続けて行きます。私たちは確かに希望を持って生きる者です。

同時に、私たちは希望によって生きる者です。辛いことがあっても、希望が私たちの歩みの原動力になっている。苦しくても主を見上げて信頼して歩み続けて行く。このような歩みを私たちが信仰者として為して行くために、希望を持って歩み続けて行くためには、希望に対する確信が必要です。確信がなければ、私たちは希望を持ち続けることは出来ません。神はこのように言われた、でも、本当かな？ともし思っているなら、私たちは信頼をもって確信をもって、希望を持って生きることなど無理でしょう。私たちがもうすでに見たように、ローマ人への手紙５章５節でパウロは**「この希望は失望に終わることがありません。…」**と書いています。つまり、彼は希望を持って生き抜いたクリスチャンが神の前に立つときに、辱められること、恥ずかしい目に合うことは決してないと語ったのです。あなたが大変な中にあっても、主を見上げて希望を持って歩み続けて行くなら、あなたが主の前に立ったときに、そのすべてを覚えておられる主は、あなたにすばらしい報いをくださるのです。あなたは決して主の前で恥じ入ることはないと、すばらしい約束です。

神は私たちにすばらしい約束を与えてくださった。また同時に、同じローマ人への手紙１０章１１節でもこのように言っています。**「聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」**。もし、私たちが主なる神に信頼するなら、この方は絶対にあなたを失望させないと言うのです。なぜ、そうなのでしょう？それは皆さん、私たちに与えられた希望は父なる神によって確約されたものだからです。先日、家電店である物を購入したとき、レジでお金を支払ったときに係りの人から「この紙を半年間大切にキープしてください。」と言われました。「これは保証書です。半年の間に何かあったらちゃんと修理します。」と。それほど高いものではなかったので、正直、こんなものにも保証書が付いているのかと思ったのです。でも、ご存じのように、保証書は何かあれば責任をもって修理をしてくれることを確約したものです。私たち信仰者に与えられた希望は神の確約付きなのです。そのことについて、ヘブル人への手紙の著者は１０：２３で**「約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。」**と言っています。著者は「いいですか、皆さん。この約束をくれたのは全能なる神さまですよ。その神が約束を曲げること、守れなかったからと言って謝罪するようなことはあり得ない。相手は神です。全能のお方、主権者なる唯一の神です。その方が言われたら必ずそ

の通りになる。」と教えるのです。ですから、私たちの希望は神の確約付きなのです。「わたしは必ずこうする。」と言われたなら、その通りになるのです。この方は神だからです。

私たちはどのような希望を持って生きているのでしょう？私たち信仰者の希望とは何ですか？すでに見て来たように、一つは私たちには永遠のいのちが約束されていることです。私たちには天国が約束されているのです。私たちは死んでも間違いなく天国に至るのです。それは神ご自身の信仰者であるあなたに対する約束です。イエス・キリストを信じる信仰によって救いに導き入れられたあなたに、この約束は与えられたのです。この希望を持って私たちは生きるのです。「私は死んでも生きる。私はこの主とともに永遠を過ごす。」と、その希望をいただいた者として私たちは感謝を持って今日を生きて行くことができるのです。

また、私たちに与えられているすばらしい希望は、いつか私たちは栄光のからだをいただくということです。この罪のからだから完全に解放されて、もう神を悲しませることのない栄光のからだをいただくのです。待ち遠しくありませんか？歳を重ねることもなく、痛みを覚えることもなく、病にかかることもなく、もちろん、それもすばらしいことですが、何よりも、私たちを救ってくださった神、私たちの罪のために身代わりとなって十字架で死んでくださったこの方を悲しませることがない、その栄光のからだをいただく、その日が約束されているのです。この保証を神は私たち信仰者に与えてくださったのです。信じるに値する約束です。

信仰者であるあなたは、神は必ず約束を守られるとそのことを信じておられるはずです。しかし、同時に、その希望、その確信がぐらつくときがあるというのも事実でしょう？いろいろなことが起こってその中にあって、先ほどまで持っていた希望がぐらついてしまう、そのようなことを皆さんは経験なさったことがあると思います。今、私たち一人ひとりが自らに問いかけなければいけないことは、私たちの人生の中で、生活の中で、間違っていると分かっていながら、仕方がないとして妥協しているものがないかどうかです。例えば、友達が離れて行ってしまうのを恐れて彼らに気に入られようとして、話題や趣味、遊びにおいて妥協し、彼らに沿って行こうとすること。それが間違っていると分かっていても、友達がなくなることは耐えられない。みなから煙たがられるのがイヤだからイエスのことを証しない。正しくないと分かっていながら、失職したくないから、上司や会社の言うことに従って行く、そのような生き方をしていないでしょうか？正しくないと分かっているけれど、出世のためには仕事を優先しなければいけない。どこかでそれは間違っていると分かっていながら、「でも、仕方がない」としていないでしょうか？聖書は偶像崇拝を禁じていることは分かっているけれども、しなければ親族や家族の間に問題が生じるからしなければいけないと、皆さん、妥協していないかどうかです。

あなたはイエスが語られたこのみことばを覚えておられるでしょう？マタイ５：１１**「わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。」**、なぜ幸いなのでしょう？天においてあなたに祝福があるからです。つまり、神は私たちがこの地上にあって日々戦いを経験するその中にあって、しっかりと神の前に正しいこと、神が喜ばれることを選択し、そのように勇敢に歩み続けて行くことを望んでおられるからです。しかも、そのように生きるなら、その生き方には神が相応しい祝福をくださると言われます。間違っていると分かっていながら、仕方ないと妥協していませんか？私たちの生活はいつの間にか世俗化していませんか？教会が世俗化していないでしょうか？教会も私たち信仰者もこの世とは違うのです。神がこの世からあなたを救い出してくださった、あなたは神に属するのです。この教会も神に属するものなのです。「もし、わたしのために迫害されたならあなたは幸いです。わたしはあなたの苦しみを知っていて、そして、その苦しみ中であなたがしっかりとわたしを見上げて生きて来たその信仰を私は覚えていて、そして、それに対して相応しい祝福を与える。」と、神はそのように私たちに約束してくれたのです。

ペテロが教えているＩペテロ４：１２－１３を見てください。**「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、:13むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。」**、ペテロは大切なことを教えました。大変な苦しみの中にいる兄弟姉妹たち、信仰者たち、彼らに対してペテロは四つのことを言いました。

（１）苦しみには目的があることを覚えておきなさい＝１２節に**「あなたがたを試みるために」**とあります。つまり、今あなたが信仰ゆえに経験している大変な問題や苦しみは、実はあなたのためです。なぜなら、その試練を通してあなたはよりキリストに似た者に変えられて行くからです。だから、**「火の試練」**と記されているのです。精錬されて行くのです。不純物が除かれて行くのです。よりキリストに喜ばれる者へと変えられて行くのです。

（２）苦しみは主によって与えられた＝**「何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、」**

つまり、あなたの生活に起こっていることは偶然ではないと言います。実は、それはあなたに必要だから神があなたに与えていると言うのです。そして、それは今日で終わるのではなくて、天に行くまで続くと言っているのです。

（３）苦しみは特権である＝１３節の初めに**「キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。」**とあります。この**「あずかれる」**とは「親密さ、仲間づきあい」で、そこから「分かち合う」という意味があります。つまり、私たち信仰者とイエス・キリストは一つだと言っているのです。キリストの姿が現わされるところでは、この世は必ず迫害をします。ですから、あなたが信仰ゆえに受けているいろいろな苦しみは、人々があなたの内にキリストを見ているからです。苦しみは特権です。先程見たように、神はそのことを全部覚えていてくださって、天で報いをくださるのです。褒美をくださるのです。

（４）主からの報いをいただく＝１３節**「むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。」**、ペテロはここで主なる神からのすばらしい祝福があることを教えています。その祝福は喜びだと言っています。そして、このみことばを見ると、ペテロは非常に面白いことを言っています。**「現われるときにも、喜びおどる者となるためです。」**と。**「現われるとき」**、将来、私たちがイエスの前に立つときのことです。イエスにお会いするときです。あなたが主イエス・キリストの前に立ったときにあなたは喜ぶと言うのです。**「喜びおどる」**とは非常に喜ぶことです。なぜなら、主に従って来たことが無駄でなかったことがはっきりするからです。主はあなたが為した小さなことも覚えてくださって、それに相応しい報いをくださるのです。どんなことでも主の栄光のために為すことは無駄ではないのです。自分のためにすることは無駄です。燃えてなくなってしまいます。しかし、主のためにしたことは主が覚えてくださり、それに相応しい報いを与えてくださる。だから、**「喜びおどる」**、非常に喜ぶと言うのです。主のために生きた人生は無駄ではなかったと。こんな短い人生です、あっという間に終わってしまいます。しかし、神はこの短い人生において私たちが主に従って来たことを覚え、祝してくださるのです。神は私たちに考えられない祝福を約束してくださっているのです。

しかし、先週話したように、**「現われるときにも」**ということは、確かに、主イエス・キリストの前に立ったときに信仰者は非常な喜びをいただくのですが、その喜びは未来だけでなくて現在のことでもあるということです。だから、**「現れるときにも」**となっているのです。今、この地上にあって私たち信仰者は神の祝福をいただき、喜びを持って生きることが出来るのです。日々の生活においてあなたが主とともに歩んでいるなら、神はあなたを祝して喜びに満ちあふれさせてくださり、そして、あなたが天に上がったときはその喜びはもっと大きなものになると、そのようにペテロが教えるのです。このようなすばらしい約束が与えられているのです。キリストの栄光が現わされるときとはキリストの再臨のときです。キリストにお会いするときに私たちはこのようなすばらしい祝福にあずかれるのです。

そうすると、皆さん、先ほど私たちはマタイ５：１１のみことばを見ましたが、イエスご自身も私たち信仰者に対して、どんな時にも希望を失ってはならないと、そのように勧め、励ましを与えておられるのです。ペテロも「妥協せずに希望を持ってしっかりと歩み続けて行きなさい、祝福を逃してはいけない、希望を持って生きなさい。」と言います。そして、パウロも「希望を失うな」と語るのです。ガラテヤ６：９に**「善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。」**とあります。神に喜ばれることを一生懸命に選択しそのように歩んでいる、でも、その生活に様々な問題があるし、辛いことも一杯ある、もういいかなと思うことがあっても、そのように歩み続けて行きなさい、必ず、祝福を刈り取ることになるから、そのように歩み続けて行きなさいと言います。こうして私たちの愛する先輩たちや主ご自身が、私たちにすばらしい励ましを与えるのです。「希望を見失ってはいけない。しっかりとそれを見据えて歩み続けなさい。」と。

今日、私たちは８章１９節から２２節までを見て行きます。それを見る前に１８節のみことばをもう一度思い出すことが必要です。１８節にはこのように記されていました。**「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」**、パウロは現在の信仰ゆえの苦しみと将来の神の祝福を天秤に掛けるなら、それは比較にもならないと言ったのです。すばらしい祝福がある、それを知っていたパウロは喜んで主に仕え続けました。パウロはこの１９節から、１８節で話したことの説明を加えて行きます。私たちに約束されている栄光とはどんなにすばらしいものか、その説明を加えて行くのです。それを加えることによって、信仰者一人ひとりが、つまり、あなたが希望を失うことなく希望を持って歩み続けて行くように、彼は励まそうとするのです。ですから、今日私たちが見る１９－２２節には、被造物自体も実は新しくされること、この希望を持って歩んでいる、被造物も同じだとあります。そして、２３－２５節には、実は、生まれ変わったあなた自身も内側からその願いを持っているとあります。新しく生まれ変わった者として、栄光のからだが与えられるその日を待望しながら生きると言うのです。そして、あなたが希望を持って生きて行けるように、聖

霊なる神があなたを導き続けてくれると２６－２７節に教えています。
　さて、１９－２２節**「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。:22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」**、ここで私たちが気付くことは、パウロはここで被造物を擬人化していることです。被造物がこのような声を上げているのです。普通に考えると、「声を上げる」というのは被造物の中でも限られます。人間、また、天使ではないかという考え方があるのは確かです。ところが、ここで言われている被造物とは人間でもないし天使でもありません。実は、自然界なのです。なぜなら、２０節に**「被造物が虚無に服したのが」**、つまり、今のこのような状況に服したのが**「自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、」**とあり、パウロはこの被造物に関して、今の状況に陥ったのは彼らが何か悪いことをしたからではなくて、別に原因がある、その結果、今のような状況に置かれていると言うのです。そのように考えたときに、明らかに罪であると分かっていながら神に逆らったのは人間です。そうするとこの条件に当てはまらないのです。なぜなら、人間は神がこうしてはならないと言われたことを、自らの意志で選択して、神に逆らうという罪を犯したからです。天使はどうですか？サタンや悪霊たちは？彼らも自らの意志によって神に逆らう選択をしたから、サタンである悪霊として神に逆らい続けているのです。そうすると、この２０節で教える**「自分の意志ではなく」**という被造物は、人間でもないし天使でもない、神によって造られたこの自然界です。自然界が現在の苦悩と堕落の中にあって、そのことを嘆きながら、そこから解放されるとき、そのときをしきりに待ち望んでいると、パウロはそのように言うのです。
　ですから、この１９－２２節は「自然界の希望と苦しみについて」パウロは述べているのです。全く私たちと同じことです。これを述べることによってパウロは私たちに、この自然界と同じように忍耐を持ってしっかりと歩み続けて行くようにと教えようとするのです。今日、私たちは「希望に対する自然界の姿」を見て行くのですが、この中に二つのことを見ることができます。一つは「被造物の希望」です。そして、「被造物の苦しみ」が記されています。

☆希望に対する自然界の姿

Ａ．被造物の希望　　１９－２１節

「被造物の希望」に関して、私たちはここに四つのことを見ることができます。

１．希望に対する態度　　１９節

　まず、「希望に関する自然界の態度」です。１９節を見ると**「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。」**、切実な思いで待ち望んでいると記されています。この**「待ち望む」**という動詞と**「切実な思い」**という名詞、この二つのことばは彼らの態度がどのようなものかを私たちに知らしめてくれます。**「待ち望む」**とは「家を離れて」と「出て」と「迎える」という三つのことばが合成して出来たギリシャ語です。ですから、パウロがここで言っていることは、非常に待望している様子、期待をもってまだかまだかとまさに一日千秋の思いで待っている、そのような姿です。しかし同時に、忍耐を持って待っている、もう迎え入れる用意も備えも出来ている様子です。この動詞は現在形です。というのは、このような状態を継続しているから、このような状態で自然界が待っているということ、そのことをパウロはここで言っているのです。
　また、**「切実な思い」**とは「首を伸ばして待ち望む、待ちきれない思いで待ち望む」という意味です。つま先立ちして、まだかなぁと思ってその方向を見ている様子、そのことばをパウロは使うのです。また、ある辞書では「他のすべてのことから離れてある一つのことに集中すること」とあります。そのことばかりを待っているのです。早くその日が来て欲しいと…。自然界のその様子が見えます。自然界はこのような思いをもって希望が現実のものとなることを待っているのです。

２．希望の対象　　１９節

　これはキリストの来臨のことです。１９節に**「神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。」**とあります。この**「現われ」**とは「出現する」ということです。帰って来られるのです。コロサイ３：４には**「私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」**とあります。キリストが現われるときにあなたがたも栄光のうちに現われると、再臨のことです。主イエス・キリストが帰って来られるときに、あなたがたもともに現われるというのです。空中再臨のことではありません。イエス・キリストがクリスチャンを伴って地上に帰って来る、そのときの出来事をパウロはここで話しているのです。ペテロは使徒の働き３：２１でこのように語っています。**「このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。」**、イエスは天にとどまっているけれども、万物が改まるときにその天から地上に帰って来るということです。万物が改まる時がやって来るのです。新しくされるときがやって来るので

す。これは黙示録の２１章、２２章に出て来る「新天新地」とは違います。黙示録２１章以降に出て来ることは、神がすべてのものを新しくされて新天新地を造られることです。今、私たちが見ているのは、そのときのその永遠の状況ではなくて、地上に主が千年の間王国を築かれる、そのことです。千年を迎えるときに自然界は全く新しくされるのです。それはまた後で私たちは見て行きます。

３．希望の理由　　２０節

２０節にパウロはこの希望の理由を述べています。**「それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」**と、パウロは面白いことばを使っています。**「虚無」**とは「空虚、無益、挫折」というのがこのことばの意味です。エペソ４：１７、Ⅱペテロ２：１８では「むなしい」と訳されています。（エペソ４：１７**「…もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」**、Ⅱペテロ２：１８**「彼らは、むなしい大言壮語を吐いており、…」**）、つまり、この**「虚無に服した」**とは、目標に到達出来ない、成果を上げられないという意味です。本来の創造の目的を達成出来ないでいるということです。自然界が本来の目的を達成出来ないでいるということは、言い換えると、自然界は創造の目的を達成したいのです。神の栄光を現わして行きたいのです。ところが、残念ながらそれを邪魔するものが存在しているのです。そのこともまた後で見て行きます。

ですから、パウロがここで言うことは、自然界が何かをしたから、神に逆らったからその結果としてこのような状況を自分の身に招いたのではないということです。この状況を招いたのは自然界ではなく私たち人間なのです。人間の罪の結果です。**「自分の意志ではなく、服従させた方による」**と、つまり、神によってこうなったということです。思い出してください。創世記２章で神はアダムに約束を与えました。「園の中央の木の実を取って食べてはならない。そのときにあなたは必ず死ぬ。」と。３：１７から見て行くと、アダムとエバがその神の命令に逆らった結果が記されています。**「:17 また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。」**、パウロはこのことを言っているのです。自然界が罪を犯したのではない、人間が罪を犯すことによってこの自然界がのろわれてしまったと。

４．希望の説明　　２１節

そのような状態にあって、自分たちが造られたその本来の創造の目的を達成出来ない状況にいる自然界が何を望んでいるのか？希望をもっていると言います。２１節に二つのことが記されています。**「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」**、一つは**「滅びの束縛から解放」**であり、もう一つは**「神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられる」**ことです。

（１）滅びの束縛から解放される

今見て来たように、人間の罪によってこの自然界はのろわれてしまった。滅んでしまう、破滅してしまう、そのような状況から解放されることを望んでいるのです。なぜなら、神がすべてのものを造られたとき死は存在しませんでした。植物が枯れてしまうということはなかったのです。しかし、人間界に死が入っただけではなく、自然界にも死が入ったのです。ですから、自然も死を迎えるのです。枯れるのです。神の創造にはそれがありませんでした。しかも、その土地はのろわれてしまったゆえに、何が起こったのか、先ほど見た創世記の３：１８にこのようにあります。**「土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。」**、たとえば、皆さんが花を植えると、雑草が出て来るので、一生懸命雑草を抜かなければいけない。神は初めにそのようにデザインなさらなかったのです。のろわれたゆえにそのように邪魔する物が生えて来るようになったと言うのです。そして、それだけでなく、この自然界にも死が入り込んで来たのです。これものろわれた結果です。ですから、そのような状況から解放されること、そのことを自然界は望んでいると言います。

それがいつ起こるのでしょう？主の再臨の時に起こるのです。そのときに被造物もこの束縛から解放されて新しくされるのです。彼らはそれを待っているのです。自然界はもう十分に私たちに神のすばらしさを証してくれていますが、悲しいことに、この自然界には死が存在するのです。今、桜はきれいですが、散って行く姿も私たちは目にするのです。

（２）神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられる

先程から見ているように、のろいから解放されて自由とされる、つまり、皆さん、パウロが言いたいことは、自分が罪を犯さなかったのにこのような苦しみの中に置かれてしまった自然界は、それに文句を言うのではなくて、新しくされるその日を待望しているということです。それなら、あなたがたもそのような思いを持って、新しくされるその希望をしっかり抱きながら日々を歩んで行く、その責任があるのではないかと言います。自然界は新しくされるとき主にお会いする日を待望している、**「切望している」**と、つま先で立って本当にまだかまだかと待っている。準備が十分に出来た状態で、忍耐をもってずっと待っているのです。その自然界の様子をこうして見ると、私たちは甘くありませんか？主の再臨がもう少し先に延びることを望んでいたり、「まだ、困ります」と言ってその理由を言ったりする私たち

に、今この自然界が問い掛けることは「本当にあなたは主にお会いするそのことを真剣に考えていますか？」です。あなたにとってそれが大きな希望かどうかです。なぜなら、もし、それがあなたの希望なら、その希望を持っている者に相応しく生きると思いませんか？

私たちはキリストにお会いする日はまだまだ先のことと思っていると、悪いしもべのように、好きなことをして暴れ回るのです。主人はまだ帰って来ないからと…。でも、今日帰って来るかもしれないと思っているしもべは、今日主にお会いする備えをします。そのような生き方をしているかどうかです。私たちは本当に今日という日をどのように生きているでしょうか？

先程も話したように、この自然界には大変なことが起こるとみことばは私たちに教えています。新しくされることによってどのようなことが起こるのでしょう？今、三つのことを上げておきます。

（ａ）地形に変化：ゼカリヤ１４：４，５，８，１０、 イザヤ５５：１３

新しくされることによってこの地形に変化が出て来ます。この自然界、地球上の地形に変化が出て来ます。ゼカリヤ１４：４**「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。」**、主イエス・キリストがエルサレムの東のオリーブ山に帰って来る、そして、**「オリーブ山は、その真中で二つに裂け、…」**と、このような超自然的なことが起こると聖書は預言します。イザヤ５５：１３**「いばらの代わりにもみの木が生え、おどろの代わりにミルトスが生える。これは主の記念となり、絶えることのない永遠のしるしとなる。」**、**「おどろ」**とは雑草のことです。トゲのある雑草を荊棘（けいきょく）と呼んで、その茂ったところを「おどろ」と呼んでいるのです。ですから、雑草の土地がミルトスに変わる、**「ミルトスが生える。」**のです。「ミルトス」はその当時の人々はめでたい時の装飾に使った花で、そこから「祝いの木」と言われます。つまりイザヤは、そのように棘のある雑草が生い茂った所に祝福の木が植わっている、そのように変えられて行くと言うのです。

（ｂ）砂漠の変化：イザヤ３５：２，６，７　エゼキエル３４：２６，２７　ヨエル２：２２－２７

地形だけでなく、砂漠にも変化が生じるようです。イザヤ３５：１には**「荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。」**とあります。エゼキエル書やヨエル書にも神の祝福が与えられることが約束されています。エゼキエル３４：２６－２７には「祝福の雨と野の木が実をみのらせる」と記されています。ヨエル２：２２には「荒野の牧草はもえ出る、芽を吹き出す。木はその実をみのらせ、」とあります。このように砂漠には大きな変化が生じるのです。

（ｃ）肉食獣に変化：イザヤ１１：５－９、６５：２５、エゼキエル３４：２５、イザヤ３５：９、ホセア２：１８

イザヤ１１：６－８を見ましょう。**「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。:7 雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。:8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。」**今このようなことが起こると大変です。また、同じイザヤ６５：２５には**「狼と子羊は共に草をはみ、獅子は牛のように、わらを食べ、蛇は、ちりをその食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても、そこなわれることなく、滅ぼされることもない。」と主は仰せられる。**」とあります。このように変わるということです。殺し合うことがなくなる、毒によって死ぬることがなくなるのです。神はそのようにお造りになったのに自然界がのろわれたゆえに殺し合いが始まったのです。けれども、それらから自然界は解放され新しくされると言うのです。自然界はそのときを待っているのです。今の自然界、テレビを見ても肉食獣が草食動物を追いかけて食べていますが、神はそのように造られたのでしょうか？いいえ、神はそのように造らなかったのです。でも、人間の罪のゆえにすべてがのろわれてしまって、このような結果をもたらしたと言うのです。だから、自然界はもう一度元の状態に戻ること、新しくされることを待っているのです。

イザヤ書１１章には先ほど見たように、肉食動物に変化が起こることが記されています。**「乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。」**と。１１章から１２章にはアッシリア帝国が崩壊した後、別の帝国、神の帝国、神の王国について記されています。この箇所を見ると、そこにはメシヤ、救世主について、また王国について、また王国を受け継ぐ残存者の説明がなされています。特に、１１：６－９を見ると、イザヤはここで救世主、メシヤが治める義なる王国についての説明をするのです。それがどうして可能か？イザヤは非常に面白いことを言うのですが、一つ、私たちが言えることは、神が治めるときにそこには平和が生じるということです。なぜなら、主イエス・キリスト、救世主は「平和の君」と呼ばれるからです。彼は完全な平和をもたらすのです。

それだけでなくて非常に面白いのです。１１：９**「わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」**、つまり、このようなすばらしい平和の下に、すべてが新しくされて過ごすことができるのです。なぜなら、確かに、すべて

が新しくなったから、人々も新しくされたのです。最初に千年王国に入る人たちはすべて神を信じる救われた者です。そのことがここに**「主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」**と記されているのです。**「主を知る」**とは、頭で知るというだけではありません。彼らは実践するのです。そういう時なのです。すべての人が神を知り、そして、神のみこころに従順に従うのです。そういうときがこのように約束されているのです。

エドワード・ヤングという神学者は「人が神を知ることに含まれることは、まず第一に、理論的知識である。しかし、そこには実際的な知識もまた含まれる。確かに、この二つは切り離すことができない。」と言います。異邦人の頭では「知っている」ことと「実践する」ことは別のことですが、ユダヤ人にとっては「知っていること」と「実践すること」は一つなのです。千年王国になって最初に起こることは、すべての人々は神の教えに喜んで従って行こうとするのです。なぜなら、生まれ変わったからです。そして、そのときに自然界もこのようなすばらしい祝福の中にあるのです。今とは違います。今の私たちもそうです。クリスチャンである私たちも神のみこころに従っているでしょうか？逆らってしまっています。全体がのろわれているからです。けれども、すべてが新しくされる、そのことを被造物は待望している、その日を待っているというのです。

皆さん、このすばらしい約束は被造物だけに与えられているのではありません。私たちにも与えられているのです。私たちはキリストともに治めるのです。罪を犯すことのない栄光のからだをいただいて、キリストともに治めるのです。千年の間王となるのです。

Ｂ．被造物の苦しみ　　２２節

私たちは今、「被造物の希望」を見て来ました。同時に、２２節では私たちに「被造物の苦しみ」を教えます。**「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」**、大変な苦しみの中を歩んでいるということです。しかも**「ともにうめきともに産みの苦しみを」**と、この二つの動詞は現在形です。このような状態を継続して彼らは過ごしていると言います。なぜ、うめいているのでしょう？早く変わりたいからです。早く新しくされたいからです。今の状態が辛くて仕方ないから、今の状態が憎くて仕方ないから、神を喜ばせる者に、神の栄光を現わす者に変えられたいのです。パウロはここに**「ともにうめきともに産みの苦しみを」**と出産のことを話します。出産は大変です。私自身生んだわけではありませんが、三人の子どもたちの誕生には立ち会いましたから、その様子がどんなに大変かを見て来ました。けれども、その産みの苦しみは永続しません。それは終わり、その後に赤ちゃんが生まれます。パウロが言っているのはそのことです。自然界は分かっているのです。この苦しみはいつまでも続かない。必ず、それが終わるときがやって来る。そして、約束された新しく生まれ変わるときがやって来る。だから、ちょうど、産みの苦しみをしている妊婦さんのように、これはいつまでも続かない、必ず終わるということを知って、同時に、赤子を抱くことを待望しながら、今苦しみの中にいると。自然界はこうして希望を持って生きているけれど、あなたはどうですか？と言うのです。

永遠の約束をいただいているあなたはそのような希望を持って生きていますか？私たち信仰者は希望を持って生きる者です。私たち信仰者は希望によって生きるのです。あなたは希望によって生きていますか？希望を持って生きていますか？